

青髭 8

明宏訊

女官長の顔色によって、ようやく、アンリも自分がしでかしたことの意味を思い返し始めた。だが、塑像のような、顔つきとも、あるいは、表情ともとれぬ、彼女のありさまを見せつけられる。すると、いちどははっきりとなった意味が曖昧になっていくのだった。

自分の想像通りに目の前のことが展開していかない。そのことが青年を苛立たせた。

「なんだ、どうしたというのだ？」

この平民は、貴族を目の前にしてまったくひるまない。彼が生まれる以前、現在、そして、未来にわたってそんなことは決してあってはならないのだ。

ちなみに、100人は下らない相手に対して青い血の持ち主が、赤い血の平民にたいしてその血を發揮することは、さいきんの啓蒙主義者の哲学によっては恥とされるらしい。

あの、学問の徒がのさばることによって、本来は戦士である貴族がその本職から追放されつつあるのだ。くだらない屁理屈によって政治の中枢にいる人たちに影響を与えている。

代わりに駆り出されているのが平民たちが、おかげで数万という、かつてにはありえない規模の軍隊どうしが命を奪い合う現象がニュースを賑わせはじめている。

そのことの是非はどうでもいい。この国のトップ連中と、それに準ずる高位貴族たちが考えれば済むことだ。そう思って、まっさきに脳裡に浮かんだのは、ナント王ピエール四世ではなく、ブーリエヌ女伯爵や、いま、彼が仕えているカルツカソム伯爵なのだった。

女官長の声が響く。

「お部屋に入ってもよろしいでしょうか？」

「ああ、構わぬ」

アンヌは、言葉遣いとは裏腹にずけずけと入ってくる。まるで新雪を汚されるような気分だ。

「そなたは、この部屋のことに詳しいようだな…」

「はい、前従子爵さまのご命令に従っていたまでのことですが…」

「この城はふしぎなことばかりだ…」

言い終わってから後悔した。女官長ごときにたとえ内面のいちぶでも晒したことを恥じた。しかし、すでに言の葉にしてしまったものは元に戻らない。

この地方にしか棲まない小鳥が鳴いている。少年のころ、よく捕えようとしたものだ。平民の子が捕獲に失敗したところを、青い血を發揮させた横取りした。たまたまいた父親に叱られたことを思い出す。

彼らの足下でひれ伏す平民たちの前でああいう態度をとったということは、当時は理解できなかったが、しばらくして母の言葉によってようやく父の真意をとらえることができるようになった。

啓蒙主義の学者や哲学者たちと自称する一群の人たちの道楽の結果、世に出た書籍よりもその方がはるかに、アンリにとっては合点がいく論法だった。

「お前は私が怖くないのか？」

もちろん、そういった連中の本にも目を走らせているんだろう、と暗に言ったのである。だが

、この女官長は見事にアンリの企図をはぐらかしてきた。

「お言葉の意味が計り兼ねますが……」

床に散らばった羊皮紙を拾い集めながら、アンヌはしらばっくれた返事をする。

「青い血の持ち主、ということだ」

だが、アンヌの顔は、そんな能力を自分にたいして使えないでしょう、貴族さまとしては、という啓蒙主義者の論法からくる空元気ではなかった。

しばらく空白があった。窓を通して入り込む陽光が、赤い絨毯に影を投げかけている。それらが格子窓を通しているために、この部屋が牢獄かと錯覚させる。

若きギョイエンヌ従子爵は、ようやく口を開いた。

「わかった。聞かなかったことにしてくれ……父上はどんな仕事をそなたに命じていたのか教えてくれないか？」

「この部屋の整理です」

重要な問いにいと簡単に答える女官長に心から怒りを覚える。

「この状態でか？」

「アンリ様が来られるまで手を付けるな、というのが前従子爵さまの最後の言いつけでしたから」

貴族は自分の死を数か月前には本性的に知りうる。この点も平民とは完全にちがう種類のいきものであることの証左であろう。

すると、この状態こそが父上のご遺志ということか……アンリは、女官長から羊皮紙の束を受け取る。ずしりと重い。それは受け継がれる仕事の深刻さを暗示しているのだろうか。

そのとき、予想だにしない声が入ってきた。彼の主君だった。緊張が走る。最上位の青い血とはここまで影響力があるということか。彼が部屋に入ったとたんにかもし出されている空気に黄金の煌めきが添えられたような気がする。

重々しく伯爵は口を開いた。

「アンリ」

「殿様……」

この城の主がこんなところに姿を見せるとは思わなかったが、すぐに、彼の意図が理解できた。そうなのだ、この部屋を、亡き父親の遺志を見せるがためにこの部屋にアンリを送ったのだろう。

伯爵は、アンヌを追い出そうとしないことが不思議だったが、あえて、質問する気にならなかった。この城の奇矯さはきっと彼が主であるというごく単純な理由を基礎にしているにちがいない。一の重臣とはいえ、家来ごときが口を挟める性格のことではないだろう。

主は、窓際まで来てまぶしい陽光に青い目を細める。

「どうだ、ジョフロアの部屋は？」

「実にちゃんと整理されていますね」

「なるほど、よくわかったろう。そなたが呼び戻された理由が……」

「そして、いとも簡単にこの私が逐電できた理由も、よくわかりました」

アンヌがいるにもかかわらず、アンリは真っ正直なことを打ち明けていることがおかしかった。しかし、この城のやり方に慣れてきている、そんな自分がおかしくもあった。

「そこまでわかっているとは、さすがにジョフロアの息子だ」

「ブーリエンヌ女伯爵閣下と殿がお手を結ばれているとみていいのですね？」

「その名前をいとも簡単に口にすることは、ジョフロアならばありえんな…ま、いくらなんでもそこまであなたに求めるものではあるまい」

おそらく微笑を浮かべているのだろうが、こちらを振り返った伯の顔は、逆光のためによく見えなかった。